2009年（平成21年）6月3日　水曜日　　日本海新聞

ITPだより　砂と暮らし　砂に学ぶ……❶

〈乾燥地派遣〉

現地情報お届けします

「砂漠化防止や乾燥地の研究といえば？」「鳥取大学！」

11月にチュニジアで講義をともにしたインターナショナルな友人たちと筆者（前列左から３番目）

ということで、国内外に広く知られている鳥大であるが、人材育成（教育）にも全学をあげて力を入れている。

その一つが、国際的通用性のある若手研究者を育成することを目指した「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（略してITP）」。砂漠化問題を勉強するには現地が一番。ならば、ということで実践を重視する鳥取大学は、大学院生（修士課程）を乾燥地の国際研究機関に約1年間派遣し、現地で学生を磨いている。

現在、厳しい選考にパスしたやる気満々の学生5人を派遣中。彼らは昨年10月末に日本を離れ、12月からチュニジア（2人）、シリア（2人）、中国（1人）で研究を行っている。本年9月末に帰国予定である。

一口に乾燥地といっても自然・社会環境、文化・習慣はさまざまだ。彼らから定期的に私たちに送られてくる現地情報は、実に刺激的で、面白く、興味深い。これらを独り占めするのはもったいないと新日本海新聞社に打診したところ、この連載企画が決定した。

これから毎週「ITPだより」として、彼らの現地レポートを掲載する。スタートはチュニジアから。お・た・の・し・み・に！

（鳥取大学農学部教授・ITP主担当教員　山本定博）

（水曜日に掲載）